

## 「後から届いた母の気持ち」

### 出エジプト記 20 章 12 節

男子聖学院中学高等学校 チャプレン 井本 晴雄

聖書は「あなたの父と母を敬え」とはっきりと語ります。なぜか、それは理由があるからです。父と母、つまり君たちのご両親は命がけで君たちを愛するからです。命を懸けて君たちを愛してくれるからです。その愛に気づいて、その想いに応えてもらいたいのです。

ところで母の日はいつからあるのでしょうか。御存知の方も多いかも知りませんが、母の日は 1900 年代のアメリカヴァージニア州が起源といわれています。今から 100 年ほど前の 1905 年 5 月 9 日のことです。アンナ・ジャービスという人のお母さまが亡くなりました。アンナ・ジャービスは母親のことをとても愛していましたし、とても尊敬もしていました。アンナ・ジャービスの母親は教会学校で教え、娘のアンナはその生徒のひとりでした。

やがて彼女は、亡くなったお母さんを追悼したいという想いから、お母さんの亡くなった三年後の 1908 年 5 月 10 日、フィラデルフィアの教会で白いカーネーションを配りました。これがアメリカで初めて行われた母の日だと言われます。その後、このことが全米に広まり、6 年経った 1914 年、その時のアメリカ大統領だったウッドロウ・ウィルソンが5月の第二日曜日を母の日と制定したのが今日の母の日になっています。

生徒諸君の作文はとてもよい作文でした。朗読してくれた5名だけでなく、実は 121 名全員がよい作文でした。担任の先生方は選ぶのに大変苦勞をしました。みんな 12 年、あるいは 13 年育てられてきて、きっと、君たちは君たちなりに親の愛に気づいてくれているのでしょう。そんな思いを持ちました。

今日、選ばれなかった生徒諸君のなかで、ある生徒はこんなことを書いていました。

「毎朝、お弁当を作ってくれてありがとう。ぼくはまだお弁当一年生だけど、高1の姉は幼稚園から12年もお弁当を作ってもらっています。僕は、毎朝、お母さんのお弁当を作っている音で目が覚めません。」

とても微笑ましい、朝の風景が目には浮かびます。

こんなことを書いていた人もいました。

「お母さんは仕事をしていて、ご飯をつくってくれて、毎日毎日とてもたいへんだと思うので、普段は伝えられないことを伝えたいと思います。いつもありがとう。そしてこの学校に入れてくれてありがとう。」

このほかにも、怪我をしたぼくをみて半狂乱になって救急車を呼んでくれたこと、熱を出したぼくを一晩中一睡もせずに見病してくれたこと、いじめっ子から助けるためにお母さんが見たこともない顔で怒っていたこと、などたくさんの、ほんとうにたくさんの感謝が書かれていました。普段、もちろん口にはしないけれど、みんな心のどこかで、とつてもとつても感謝しているということが伝わってくる作文ばかりでした。きっと大切に大切に育てられたのでしょう。でも、その感謝をなかなか口に出して言うことは難しいですね。

同じように、君たちのお母さんも、君たちのことを心配し、大切にし、愛し、宝物だと思っています。いつもはがみがみ言っているかも知れないけれど、お母さんも、君たちに「我が家の子どもとして生まれてきてくれてありがとう」と思っているはずです。

こんな話があります。

今から半年ほどまえのことです。去年の9月18日のことです。お母さんが書いた手紙が娘のところへ届きました。娘の名前は小野望美さん、手紙を受け取ったときは小学校3年生、そしてこの春からは小学校4年生になりました。望美さんは、この、お母さんからの手紙を読み終えた後、お母さんの思いがこもった手紙を、自分の宝箱にしまったのでした。

お母さんが手紙を書いたのは今から3年前、2009年5月、望美さんが小学校に入って一か月经った頃のことです。手紙は、お母さんの見慣れた丸い文字が並んでいました。手紙には、こんなことが書かれていました。小学校3年生にも読めるようにひらがなが多く使われています。

「このてがみがとどいたとき、のぞみはどんな子どもになっているのでしょうか？」

「入がくしたつぎの日から1人であるいて行き、夜にはつかれてごはんもたべないで、ねてしまい、おこすとねおきがわるく、だだになってとても手がつけられない子どもでした」

「でもげんきに学校にいつてくれるだけでおかあさんは、とてもあんしんしていました」

封筒には、高校2年生の長男、勝利くん、そしてお姉ちゃんで中学3年生の好美(このみ)さんに宛てた手紙も一緒に入っていました。長男、勝利くんの手紙には

「妹たちにやさしいお兄ちゃんになっているように願っています。」

中3の好美(このみ)さんには

「手伝いにとでも感謝していました。もっと料理がうまくなっているかな」

とつぶられていました。

この手紙は、3年前、望美ちゃんのランドセルを買ったとき、ランドセルメーカーのサービスで「未来のわが子へのメッセージを書いて」と呼びかけたものでした。その時書いたお母さんの手紙が、2年たって、望美ちゃんが3年生になった昨年の9月に届いたのでした。

この一家は宮城県亘理(わたり)町の海岸から1キロのところに住んでいました。宮城県亘理町とは、その町を守っていた防波堤を津波が超えて、その町では250名以上の方が亡くなったところでした。望美ちゃんの家族は両親と兄弟、ひいおばあちゃん、そしておじいちゃん、おばあちゃんの8人家族でした。家族のうち、津波でお母さんと、ひいおばあちゃんが亡くなりました。

望美ちゃんのお母さん、由美子さんは町内の電機会社に勤めていたのですが、震災直後、家族を心配して職場から車で家に戻り、ひいおばあちゃんとともに津波にのまれてしまいました。ふたりとも6日後にご遺体が見つかったそうです。穏やかな表情だったことが、遺された家族のせめてもの救いとなりました。

震災の半年後、昨年夏におばあちゃんも亡くなり、今はたんぼの多い内陸の一軒家で暮らしているそうです。食事をつくるのは長女の好美(このみ)さんの係。4年生になった望美ちゃんは、最近お姉さんに頼まれて台所に立ってみんなの茶碗を洗うようになったそうです。

望美ちゃんは「お母さん、なんで死んだんだろ。何も悪いことしてないのに」と涙ぐみ、眠るまでずっとお父さんの手を握っていることも多いそうです。学校に行きたがらなかつたり、教室で机に顔を伏せ、声を出さずに泣いたりすることもあります。

「なんだかお母さんに会えるみたい」

手紙を手にして、望美ちゃんはそう言いました。そしてこう続けたのです。

「もう、わがままは言わない」

お姉ちゃんの好美(このみ)さん宛の手紙もありました。それを手にしたお姉ちゃんは、

「口ごたえいっぱいしちゃった。もうちょっと手伝えればよかった」と目を赤くしました。

望美ちゃん宛の手紙の最後にはこう記されていました。

「3年生になった今は、すこしはおうちのでつだいをしてくれているのでしょうか。このてがみをみんな  
でよんでいるところをたのしみにして、これからおかあさんはがんばっていきます。」

そう記されていたそうです。

本当は、日ごろから感謝の気持ちを持っているけれど、照れくさくて、なかなか言葉にすることができないのが私たちです。そんな、日ごろことばにできない気持ちを作文として書いてもらったのが、今回の作文です。121名、それぞれの思いが詰まった作文です。みんな、一人一人の作文は、望美ちゃんに届いたお母さんからの手紙のように、大切な、大切な宝物です。

祈ります

天の父よ、今日の礼拝を感謝いたします。父なる神さま、あなたがわたしたちを愛して下さったからこそ、わたしたちは人を愛することができます。それは親が子を思う愛に現れています。どうかその愛に気づくことができますように。アーメン

2012年5月23日 男子聖学院中学校 母の日礼拝